

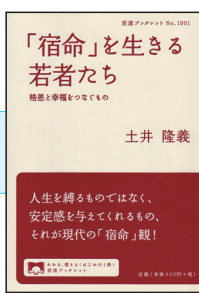


との比較、時代による社会構造等の変化もふまえてこの相反現象を解き明かす。今の40代以上にとって、「宿命」は自分の人生を縛り、不自由なものにする桎梏と捉えられているが、30代以下の人たちにとって、「宿命」とは人生を縛るものではなく、安定感を与えてくれるものであり、また、「努力」という言葉は、40代以上にとつて、自分の能力や資質の不足分を補うための営みと捉えられるが、30代以下にとつては、努力できるか否かも、自分の素質の一部とみなされるようになっていくという。

今日の社会の成熟化においては、かつてのように超越的な目標は胸に抱きにくくなった。多

社会環境悪化の一方で、若者の幸福感や生活満足度は高まっている。著者は「宿命」をキーワードに、他世代

「宿命」を生きる若者たち
格差と幸福をつなぐもの



土井隆義 著
670円 岩波ブックレット
☎03-5210-4000

（前聖徳大学教授・西村美東士）

の社会で培われた期待水準の高さは、たとえ社会状況が大きく変わってもなかなか拭い去ることができない。そのような中高年特有の高い期待水準を押し付けてはいけない。若者の今の強みを生かした指導こそが重要だと本書は教えてくれる。

著者の言を借りれば、若かりし頃に成長社会を体験したベテランの教師にとつて、当時の社会で培われた期待水準の高さは、たとえ社会状況が大きく変わってもなかなか拭い去ることができない。そのような中高年特有の高い期待水準を押し付けてはいけない。若者の今の強みを生かした指導こそが重要だと本書は教えてくれる。

くの若者たちが、内実のよくなるから異なる次元の目標のためではなく、その営みの過程それ自体を楽しみ、なにか別の目標を実現するためではなく、人間関係そのものを楽しむ自己充足的な人間関係を紡いでいると著者は評価する。ただし、「剥奪感さえ抱かせないような排除」が人知れず進行することについては、「認識論的誤謬」だとして、外部へと開かれたつながりのなかで、視野を広げ、格差に気づき、是正の声を上げるよう訴えている。